

平成25年度 パートナー全体研修・交流会

“平成25年度パートナー全体研修・交流会”が2月22日(土)にセンター多目的ホールにて開催されました。この全体交流会は日ごろ各グループ内で活動しているパートナー同士がグループを超えて交流を深めることを目的に年1回の頻度で開催しているものです。

今年度のプログラムはセンター加藤参事の開会挨拶で始まり、午前中は相崎センター長の講演、昼食会をはさみ午後の部は各グループの活動報告、センターからの連絡と進められました。

相崎センター長の講演は”湖岸の修復・再生”と題して行われました。常陸川水門の完成から50年が経過し湖岸植生帯の減少など霞ヶ浦における湖岸植生帯の変化について述べられた後、霞ヶ浦だけでなく宍道湖・中海・諏訪湖で湖岸再生事業として行われている様々な例(緩傾斜湖岸・ヨシ筏・自然再生地区など)を写真で紹介されました。ある所でうまく行っても波の状態など場所に応じた方法が大事で様々な方法が試行されていることなどが理解でき有意義な内容でした。

参加者全員がテーブルを囲んでの昼食会(今年は例年の豚汁がなくて残念)では普段なかなか話す機会の少ない他グループのメンバーとの交流が出来る場となりました。

午後の部では各グループリーダーよりグループ活動内容の報告がありました。各グループとも自主活動に熱心に取り組んでおられる様子がうかがわれました。日ごろ、他グループ活動についてはあまり情報が入らないので参考になります。特に、魚グループの報告は活動している姿がDVDに纏められており分かりやすく好評でした。

最後にセンター宮本課長から、センター開設10年を迎えるにあたり検討を進めているパートナー制度の見直し改正について説明がありました。パートナーの意見も聴いていただき、より良い制度になることが望めます。

参加されたパートナーの方々の意見は次ページに“アンケートのまとめ”として掲載してありますが全体として“参加して良かった、今後も継続して実施した方が良い”との意見が多かった。課題としては、年々参加者が減少していることがありますが先に述べた制度改正も含めて対応を検討し、より充実したパートナー全体交流会として継続実施できるよう取り組みたいと思います。

パートナーの皆様の更なるご協力をお願いいたします。

(企画部会：安川)



参加者集合写真



センター長講演会



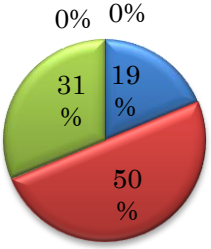
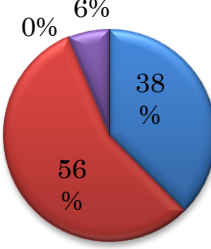
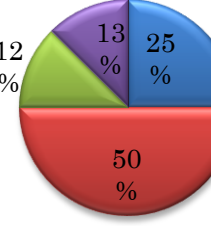
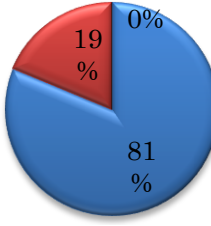
昼食会

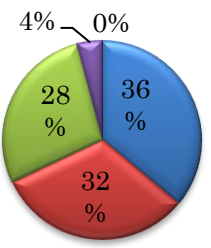


グループ活動報告

平成25年度 パートナー全体研修・交流会アンケートのまとめ

1. 全体交流会について

1) 今回のパートナー全体交流会に参加してみていかがでしたか	2) 一番良かったプログラムはどれですか	3) 今回の全体交流会に参加してどんなことを得ることができましたか	4) 今後とも全体交流会を実施した方が良いと思いますか
<ul style="list-style-type: none"> ■非常に良かった③ ■良かった⑧ ■普通⑤ ■あまり良くなかった 0 ■良くなかった 0 	<ul style="list-style-type: none"> ■センター長の講演⑥ ■各グループ活動の紹介⑨ ■昼食会 0 ■その他① 	<ul style="list-style-type: none"> ■他グループパートナーとの交流④ ■湖岸の修復・再生についての知識⑧ ■あまり得るものはなかった② ■その他② 	<ul style="list-style-type: none"> ■実施した方が良い⑩ ■どちらでも良い③ ■実施しない方が良い 0 

5) 今後の全体交流会にどんなプログラムを取り入れて欲しいですか
<ul style="list-style-type: none"> ■外部講師による講演⑨ ■霞ヶ浦に関する研修⑧ ■市民団体活動現場見学⑦ ■参加者による実技研修① ■その他 0 

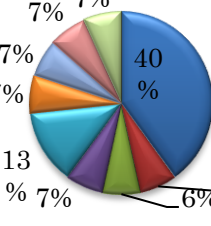
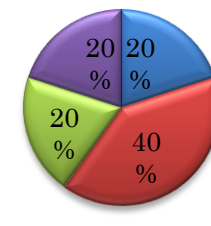
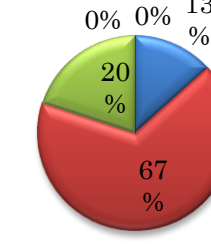
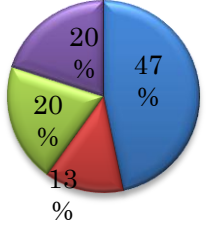
質問1の参加した結果では“非常に良かった”“良かった”と肯定的に回答した人が69%を占め、質問4では80%以上の人が“今後も実施した方が良い”と回答している。また、2ヶ月に1度の開催など積極的な意見も見受けられ、交流会は一定の評価を受け今後も継続して実施して行くことが求められている。

プログラム内容としては“センター長の講演”“各グループの活動報告”の評価が高い。今後取り入れて欲しいプログラムとしては“外部講師による講演”“霞ヶ浦に関する研修”“市民団体活動現場見学”などが挙げられている。

パートナーに登録しようと思った理由で“様々な人と交流するため”を挙げられていますが、グループ内で・他グループと・センター職員との交流を今後に期待している方が多い。

これらを勘案すれば、“パートナー間の交流の場を作る”“講演会や市民団体の活動現場の見学”など環境や霞ヶ浦に関する新しい情報に触れられる機会をつくるプログラムを企画し更に充実した全体交流会の継続実施が期待されていると考えられる。

2. パートナー活動について

1) センターパートナーに登録した年度を教えてください	2) センターパートナーに登録しようと思った理由を教えてください	3) パートナー活動を行って、登録の目的は満たされましたか	4) 今後のパートナー活動に期待することは何ですか
<ul style="list-style-type: none"> ■平成17年⑥ ■平成18年① ■平成19年① ■平成20年① ■平成21年② ■平成22年① ■平成23年① ■平成24年① ■平成25年① 	<ul style="list-style-type: none"> ■様々な人と交流するため④ ■環境問題に興味③ ■ボランティア活動に興味④ ■退職後の生きがいつくり④ 	<ul style="list-style-type: none"> ■満たされた② ■ある程度満たされた⑩ ■あまり満たされていない③ ■満たされていない 0 ■新規登録でまだ何とも言えない 	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ内の交流⑦ ■他グループとの交流② ■センター職員との交流③ ■自主活動を盛んに③ 

平成 25 年度パートナーグループ活動報告

企画部会

パートナー企画部会は2009（H21）年5月に設立され、満4年になります。

設立主旨は従来のグループ内活動に加え、各グループ間の交流・連携を図るべく、グループ横断的なイベントを企画し、センターの支援を得ながら実践することです。種々の課題はありましたが、本年度も企画部会活動は関係者のご協力で1回も休むこともなく開催でき、各プロジェクトに於いても、ほぼ計画通り達成することができました。

以下に、主要3テーマの実施概要について報告を致します。

(1) 活動情報の発信では、

①センターフェスティバル（夏まつり）では、昨年同様パートナー活動ブースの出展をセンター及び関係団体のご協力を得て実施できました。当日は、猛暑の中多くのお客様（141人）で盛り上がりました。出展内容は、各パートナーのグループ活動状況をパネル掲示で紹介し、グループ活動に関するクイズや紙粘土細工などを企画し、お客様に喜んで頂きました。

開催にあたり、パートナー有志4人で6回の実行委員会を開き準備をしました。

②パートナー情報誌「香澄」については、センター及び編集委員各位のご協力により計画通り6回の発行ができました。一昨年から、センターホームページへのアップ等もあり、多くの皆様に活動状況を知って頂けたのではないかと思います。

(2) 研修・交流の充実では、

①センターパートナーとして幅広い知識の習得及びスキルアップを図るため、昨年まで開催してきましたが、センター事業との整合性も考慮して欲しいとの提案を受け、昨年計画したプロジェクトから外し、（一社）霞ヶ浦市民協会による交流サロン交流促進事業の霞ヶ浦講座に参加することにしました。環境保全に関わる講座開設や施設見学などは、大変勉強になりました。（平成22年度に7回、平成23年度に5回）。

②パートナー全体研修・交流会の企画では、2月22日に多数のパートナー参加のもと、「湖岸の修復・再生」について、相崎センター長による貴重な講演をして頂き、今後の環境保全活動に大変参考になりました。

普段なかなか知る機会の少ない他グループのメンバーとの、昼食を共にした交流や各グループの活動及び自主活動の紹介などで、グループ間相互の交流を深めることができました。

(3) 霞ヶ浦流域の市民団体との交流では、

①環境保全活動市民団体との交流会については、11月2日（土）に認定NPO法人の「宍塚の自然と歴史の会」の皆様との交流をさせて頂きました。

今回は、実際に活動しているメンバーの方と初めて現地での体験交流として敷地内の遊休地にあるセイタカアワダチソウの駆除を行いました。

自然を守るため様々な課題にも根気強く取り組んでいる活動には大変感動しました。やはり、貴重ないきものが生息し続けるには地域を巻き込んだ地道な活動が必要だと感じました。

②センター交流サロン事業への参画については、事業計画等についてパートナーとして提案してきました。また、事業計画等についても企画部会で報告し、共有化してきました。

(4) その他の活動として、

①普通救命講習も昨年同様、センター及び神立消防署のご協力で実施することができました。暑い中、救命士の指導のもと参加者一同が大声を張り上げながら真剣に取り組み、非常時の対応について貴重な体験をすることができました。

②3年目となるパートナークリーン Up 活動（毎月1回）ですが、霞ヶ浦湖岸（約2.3Km）の範囲で清掃活動を実施しました。この活動は、センターの協力を得たパートナーの自主活動です。年々ゴミが少なくなり、嬉しく思います。

平成26年2月までの実績として、天候不順で2回の中止がありましたが、延べ回収量は41袋（可燃：22袋／不燃19袋）延べ参加者44名と多くの方にご協力頂き、活動してきました。

限られた範囲ですが、昨年に比較するとゴミの回収量も減少（約35%減）し、結果が見える形で現れるのでモチベーションも上がります。ご協力ありがとうございました。

（企画部会 尾形）

イベント・記録グループ

当グループの主な活動は、センターイベントの補助活動とパートナーによる自主活動であります。

1. センターイベントの補助活動では
(1) 5月の「子供環境フェスティバル」、8月の「センター夏まつり」、12月の「霞ヶ浦水質浄化ポスターコンクール表彰式」、等のイベントにおいて、受付、記録等を行いました。

2. 自主活動では
(1) 「沖宿の昔を紐解こう会」を開きました。
昨年8月に当センターの所在地である「沖宿をもっと知りたい」という思いから地元の長老をお招きし、座談会形式で約2時間お話を伺いました。

主な話題を要約しますと

霞ヶ浦湖岸や谷津田でのレンコン栽培は、商品価値が高いこと、湖岸地域がレンコン栽培に適していたことより、昭和40年頃、稲作からレンコン栽培に変わり、更にレンコンを掘る重労働の軽減のために、地元の方が水圧を利用してレンコンを掘るための水流圧縮ポンプを考案、これによりレンコンを掘る作業もたいへん楽になったとのことでした。

また失礼ですが、現在の沖宿町からは想像できませんが昭和30年頃の沖宿港は魚の水揚げも多く、町には網元が3軒もあり、またパチンコ屋もあり大変にぎやかな町であったとのこと、そのほか長老の子供時代の遊びや暮らしぶり、土浦までの交通手段、当時の農作業の様子などいろいろお話を伺いました。

(2) 「いきいきフォト展」開催。

パートナー全体交流会の前後10日間、企画部会、植物、魚、研修、図書、イベント・記録各グループの、日頃の活動を記録した写真展を開催しました。

（イベント・記録グループ 目次）

研修グループ

研修グループの主な活動は研修室及び出前講座での水質分析、動植物プランクトン観察それに今年度新たに加わった「センター野外観察案内」などの講師補助活動と自主企画活動「フィールドで水を覗いて感じよう Part 4！」です。また、これらの進捗状況や結果、意見交換を図るための4半期毎の定例会とメンバーのレベルアップを図るための勉強会の開催です。

1) 研修室、出前講座講師補助活動

内容は霞ヶ浦湖水、持ち込まれた河川・沼等の水、水道水及び一万倍に薄めた醤油のパックテストによる水質分析と顕微鏡による動植物プランクトン観察、センター野外観察案内の講師補助活動です。研修室（湖上体験学習、環境学習）では述べ6,868人、145団体（平成26年2月現在）、出前講座では5,462人、69団体（平成26年2月現在）への講師補助活動です。

パートナーの参加状況は研修室では1回に1~6名でパートナー参加ゼロの日もありました。出前講座では、参加した日のパートナー数は1回に2名程度でした。

2) 自主企画活動

「フィールドで水を覗いて感じよう Part 4！」をテーマに各類型別に選定した5河川(恋瀬川、園部川、花室川、小野川、銚田川)下流部と霞ヶ浦(センター下)の6地点で採水、採水時の水質調査(気温、水温、透視度、電気伝導度、pH)と研修室に於ける水質分析(デジタルパックテストによるCOD、リン酸態リン、硝酸態窒素の分析)全8項目を行うものです。

この他採水点付近の植物の状況、水の色、流れ等も観察します。調査回数は春夏秋冬の年4回で平成25年5月16日(春)、7月31日(夏)、10月30日(秋)、平成26年1月29日(冬)に実施しました。各回3河川程をピックアップ、センター研究室にリン酸態リン、硝酸態窒素の水質分析をお願いしてパートナー分析値とのデータ比較を行い、パートナーの分析精度向上にも努めています。

この他、本年度は全国水環境マップ実行委員会主催の「第10回身近な水環境の全国一斉調査(平成25年6月2日)」に研修グループ有志として4名が参加。恋瀬川下流部・銚田川下流部の水温、COD調査(パックテスト)を実施しました。

3) 定例会と勉強会の実施

- ・進捗状況や意見交換を図るための定例会は4月、7月、11月、平成26年2月の計4回開催しました。
- ・勉強会は5月に述べ4回開催しました。内容は今年度新たに環境学習プログラムとなった「センター野外観察案内」についてです。講師はセンター研修担当の先生方です。

(研修グループ 浅野)



研修室での水質分析



出前授業
プランクトン観察



センター
野外観察案内



自主活動
水質分析

植物グループ

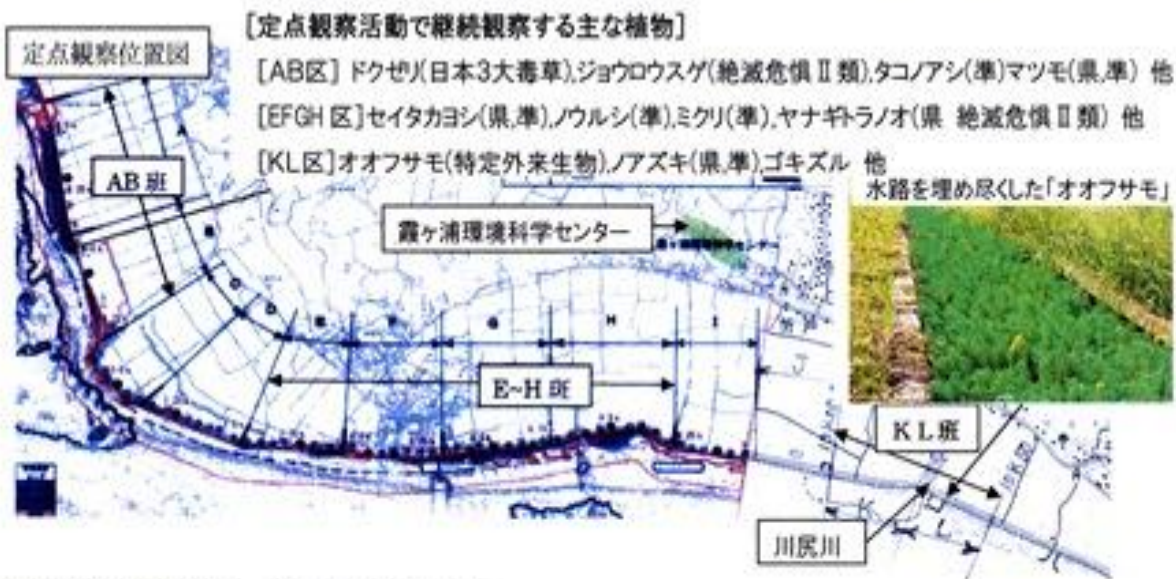
植物グループでのパートナー活動は、センター主催の「野外講座」に於ける運営補助作業と、「パートナーの自主的な学習行動」として毎月実施する湖岸での「植物定点観察」の環境学習推進活動です

野外講座は霞ヶ浦流域内の植物観察を通して霞ヶ浦の水質浄化に関心を深めてもらう目的で、年度内毎月1回、原則第2水曜日に実施されています。

定点観察活動はセンター直下の湖岸(下図)において、水質や気象の変動など環境の変化が植物相に及ぼす影響を見るため、毎月第4水曜日を定例日に絶滅危惧種や特定外来生物など継続調査を指定した植物は年間を通して、又花や実冬芽など特徴のある植物についても適時に観察・記録して、その生態写真に説明を付してセンター展示室に掲示しています。(植物グループ;有吉)



野外講座に於ける観察・解説活動



活動の25年度実績 野外講座の年間計画

月-日	テーマ	場所
4-10	春の湖岸植物と牛渡の伝説	かずみがうら市牛渡湖岸
5-8	春の里山の植物と蛟もう神社	利根町押戸 鎌倉街道
6-12	砂丘の植物と波崎の集落	神栖市波崎 會利浜
7-10	夏のヨシ原の植物と財産区	稲敷市浮島 妙妓の鼻
8-7	夏の里山の植物と湖岸植生の消長	かずみがうら市穴倉
9-11	初秋の北浦の植物と北浦航空隊跡	行方市矢幡 雁通川河口
10-9	巴川河口の植物と鹿島灘の製塩	銚田市安塚 親水公園
11-13	恋瀬川河口の植物と湖岸の史跡	石岡市高浜 恋瀬川左岸
12-11	冬の湖岸植物と漁業集落の変化	かずみがうら市歩崎、志戸崎
1-8	流域の自然・巴川源流の植物観察 と千年前の古道跡	笠間市(旧岩間町)愛宕山 同市安居・五万堀古道跡
2-12		中止
3-12	湖岸の自然・沖宿湖岸の植物	土浦市沖宿湖岸

定点観察の年間計画

活動月-日	関連活動
春 4-24	
5-22	
夏 6-25	6/5 春のデータ整理
7-24	
8-28	
秋 9-25	9/4 夏のデータ整理
10-23	
11-27	
冬 12-25	12/4 秋のデータ整理
26-1-22	
2-26	
春 3-26	3/14Am 植物G会議 (金) Pm 研修会

魚グループ

魚類グループでは月例の定点魚類等調査を基幹活動とし、これに年数回行われる自然観察会（魚類・鳥類）およびイベント（投網教室）等のセンター定期行事を加えほぼ毎月活動を実施している。本年度も例年通り特に事故や怪我などもなく、観察会では親子連れで参加する方々も多く実に盛況であった。

平成 25 年 4 月より民間から新進気鋭の福井正人嘱託職員が中村誠前嘱託の後任として着任、今期下記新体制の下諸活動を展開している（子供たちの一部から「魚のお兄さん」として親しまれはじめています）。また職務繁多の腰塚昭温前リーダーに代わり新たに本年度より新関がお手伝いさせて頂いている。新サブリーダーとなった大須賀誠一氏とともに腰塚氏には引き続きサブの立場で尽力を頂いているところである。平成 26 年 2 月現在の登録者数は 21 名にまで及んではいるが実質活動者はその半数に満たない（体力ある若手の賛同に期待）。

直近の本平成 26 年 2 月の調査については関東地方が例年になくレベルの降雪の直撃を受け、事前に非常事態と判断されたため異例の欠測扱いとなった。このような例外的事例を除けば当グループではこれまで開始以来調査をほぼ休まず継続、データ収集に努めて今日に至る。組織設置 10 年の節目に当たり諸氏が時間と労力を費やして蓄積してきた霞ヶ浦 10 定点のデータを如何に斟酌、公表・発信し有効活用できるか、当該メンバー各位の切望するところである。

（H26 年 2 月 22 日のパートナー全体交流会では本年度を中心とした魚類グループの活動の様子をビデオに収録・DVD 編集したものを上映した。自然相手の躍動感ある活動でもあって動画記録は意義深く、また今後新参加者に対し DVD で活動を紹介することも可能となろう）。

（魚類グループ 新関）

平成 25 年度体制

担当職員	福井正人 嘱託
リーダー	新関紀文
サブリーダー	腰塚昭温（前リーダー）、大須賀誠一
登録者	21 名
活動内容	<ul style="list-style-type: none">● 定点魚類等調査/ 投網採捕 ・ 同定 ・ 計測● 自然観察会補助/ 安全確保 ・ 関連補助活動● センターイベント補助/ 安全確保 ・ 投網指導その他



定点調査の様子。北池に張った氷（平成 26 年 1 月 11 日撮影）

図書グループ

図書グループのメンバーは総勢 17 名で、毎週金曜日を活動日とし、交流サロンの利用可能な日に活動を行いました。活動内容は次の通りです。

(1) 文献資料室の図書紹介文作成(全員活動)

- ・文献資料室の図書を多くの利用者に知ってもらい、利用促進を図るため、パートナー自ら図書を読み紹介文を作成します。今年度は2月末までに40件の図書紹介文を作成しました。
- ・図書紹介文の掲示は、誰にも目につきやすいように図書紹介パネル板を交流サロン内に設置しています。

(2) 新聞スクラップ(テーマ別切り抜き)の作成(希望者活動6名)

- ・引き続き、「霞ヶ浦流域における河川・湖沼・ダムに関する情報」、「環境問題をテーマとした社説・論説等」に関してスクラップを行い、完成したものから目次をつけ順次配架しました。なお、「常陽新聞“茨城の水源”シリーズ」は常陽新聞発行停止により途中でスクラップは中止しました。

(3) 読み聞かせ(希望者活動8名)

- ・活動日は毎月第3土曜日(イベント開催時は除く)とセンターイベント開催時
- ・活動日の体制は原則2名でローテーションを組み、今期9回活動しました。
- ・聞いてくれたお客さんには手作りのしおりをプレゼントしています。

(4) 霞ヶ浦Q&Aの作成(全員活動)

- ・昨年度活動してきました「霞ヶ浦や環境、郷土の歴史等」に関するQ&Aの作成を、本年度は利用者に分かりやすい情報や資料を提供するために、内容の精査・分類を現在行っています。文献資料室の利用促進の一助になればと思います。

(5) アクリルたわし教室作成指導補助(全員活動)

- ・活動日はセンターイベント開催時
- ・アクリルたわしの材料の準備や作成の指導補助を行います。

(図書グループ 平江)



「私の細道」(その10)

なすの

日光を出た芭蕉と曾良は、次の目的地である黒羽に向かったが、途中で雨が降り、日が暮れて玉入（現在の栃木県塩谷町玉生）に宿泊した。「おくのほそ道」には「農夫の家に一夜を借りた」とあるが、曾良随行日記では、「宿悪しき故、無理に名主の家に宿借る」と書かれている。勝峰晋風の「奥の細道創見」（昭和24年）によると、名主とは代々村の大惣代である玉生七郎衛門の家であったという。名主ではあったが農家であった。「宿悪しき」について晋風は、宿とは修験者の陋屋であまりに汚かったと解説している。一方、櫻井武次郎氏によると、当時、宿は紹介状がなければ無闇に泊めるなどのふれが出ており、このような場合は名主が旅人の面倒を見たという。

翌日は快晴にて、早朝に玉生を立ち、鷹内→矢板→浜村→太田原→黒羽の経路を辿った。最初の訪問が余瀬に住む俳人の翠桃宅であったので、黒羽から少し戻っているが、芭蕉は14日間この黒羽に滞在した。

この日は元禄2年4月3日、陽暦では5月21日となる。有名な「草刈るおのこ」や小娘の「かさね」の登場する章段である。「どこまでも続く茫々たる草叢の中を迷いつつ進む。途中で出会った一人の野夫が親切に馬を貸してくれた。この馬が行き着いたところで、馬を帰してくれと。馬に連れられ進むと、二人の小娘が馬の跡を追ってきた。一人を『かさね』と云い、芭蕉はこの子をたいそう気に入った。」と記している。後年、与謝蕪村がこの場面を「奥の細道画卷」に「那須の小姫」の絵として残している。この話は、その昔、中国の「韓非子」の中の「管中随馬」にあり、謡曲の「錦木」や「遊行柳」からの引用でもある。芭蕉は那須野の道行きを通じて、これらを下敷きにした物語を創作して挿入したものと考えられている。

かさねとは八重撫子の名成るべし 曾良

この句も、曾良が詠んだとして揚げているが、実は芭蕉の句であるらしい。芭蕉は後に名付け親を依頼された時に、この「かさね」という名を用いている。

安原盛彦氏によると、「芭蕉は那須野で現実の時空間を越えた異境に踏み込んだ。」と解釈している。この物語の異空間について、安原氏は曾良の旅日記に「太田原より黒羽へ三里といえども二里」とあるので、この差の一里が異空間にあたと述べている。芭蕉がこの旅で「みちのく」へ入り込むことは、現実的にも意識面でもこれまでの世界から一步踏み出していく事になる。「おくのほそ道」を文学作品として成り立たせる為には異次元の空間を通る必要があった。

私が妻と共にここを訪れたのは平成25年8月29日であり、残暑厳しい中ではあったが、見渡す限り稲穂の続く道であった。まさに延々続く黄金の絨毯の中をさまようかの思いがした。300年の歳月は、草野の迷路を見渡す限りの田畑に変えたが、不思議な世界に誘われる空間と時間はそのまま残っている思いがした。妻がハンドルを握り、私は地図を片手に道を探したが、稲穂の中の道は縦横に入り乱れ、芭蕉らの歩いたであろう道を探ることは出来なかった。我々は、玉生から矢板→大田原へと進みつつ、しばしの異空間を通過する思いをした後、いつしか黒羽に着いていた。黒羽は芭蕉の街である。「黒羽芭蕉の館」という展示施設があり、その庭に馬に乗った芭蕉とそれを追う曾良の像を見つけた。



黒羽芭蕉の館

我々が日光から黒羽に向けて通った6日後の9月4日、栃木県を竜巻が直撃し、矢板・塩谷に多大の被害を及ぼした。この日、鹿沼にも竜巻が発生して被害が出ており、まさに芭蕉らの歩いた行程を追うかのように荒れ狂った。
(パートナー 小松)

デジタルカメラ（その11）マクロとは

よくデジカメ用語で出てくる「マクロ」「マクロ撮影」について少しご説明します。

○マクロ撮影は「接写」のこと

カメラを使って撮影する技法のひとつに**マクロ撮影**というのがあります。簡単に言うと、**レンズをできるだけ対象物に近づいて撮影する接写**のことです。花や虫など小さいものに近づけて撮影するときによくマクロ撮影がつかわれます。

○マクロ撮影に適したレンズ

どんなレンズでもマクロ撮影をやろうと思えばできますが、レンズによって得意、不得意があります。小さいものを大きく写すには**撮影倍率**というのが重要になってきます。レンズの仕様で真っ先に見るのは焦点距離やF値ですが、撮影倍率って何？ と思う方の多いかと思います。

○撮影倍率の定義・・・は難しいので省略します。

簡単に説明すると、撮影倍率が大きいレンズほどマクロ撮影が得意なレンズと言えます。マクロレンズは、虫眼鏡のような構造になっていて、被写体を拡大して撮影できる上、より近づくことができるレンズです。

一般的なレンズは、撮影倍率がだいたい0.3～0.4倍程度です。しかしマクロレンズは、1倍（等倍）まで拡大できるので、小さいものを大きく写すことができます。

○通常のレンズでも「マクロ撮影」は十分楽しめる

最近のデジタルカメラには**マクロモード（チューリップの絵のアイコン）**が標準搭載されていて、マクロモードにすると通常モードよりも近づいてもピントが合うようになります。またデジタル一眼レフカメラにも同様な機能があり、マクロ（クローズアップ）モードにすることで、接写に適した設定をカメラがしてくれます。

通常のレンズで行う場合は、撮影可能距離ギリギリまで近づき、ズームレンズの場合は望遠側にして撮影すると効果的です。

（パートナー：目次）

デジタルカメラ（その12）メモリーカードの選び方

デジタルカメラの保存に使われるメモリーカードですが、どれを選んでも同じと勘違いしている方も多く、買って失敗してしまうこともあります。

ここでは用途に応じた賢いメモリーカードの選び方をご紹介します。

○SDカードを選ぶコツ

キャノン、ニコン、オリンパスなどのデジタル一眼レフカメラやコンパクトデジカメに使われるメモリーカードで、最も多く出回っているカードの1つです。

SDカードには、SDカードとSDHCカード、SDXCカードの3種類があり、現在販売されているのはSDHCカードがほとんどです。SDHCカードは2GB以上の高容量に対応したカードで、現在主流のメモリーカードです。

SDHCカードには、スピードクラスというものがあり、Class2からClass10までの4種類が発売されています。このSDスピードクラスはカードの転送速度の目安で、数値が高いほど高速で読み書きができるため、高画質のデジタル一眼レフカメラで連写や動画撮影する際はClass8以上のSDHCカードが必須となります。連写や動画撮影などを行わない場合はClass2やClass4のSDHCカードでも充分使用できます。

私が連写や動画撮影に使っているお勧めSDHCカードをご紹介します。

○Sandisc SDHCカード

現時点では無敵の性能と安定性を誇る評価の非常に高いSDHCカードで、プロやアマチュアカメラマンも愛用の一品。RAW規格の連写やHD動画も安定して撮影できます。価格は高めです。

○トランセルド SDHCカード

価格と性能を両立した人気のSDHCカードです。安さが魅力で32GBタイプでも5～6千円位で買えます。

SDカードの他にCFカード（コンパクトフラッシュ）やxDピクチャーカードなど様々な種類があります。カメラに合ったメモリーカードをお使いください。

（パートナー：目次）

《編集後記》今年の冬は寒いですね。いつもだと3月の中旬には種まきするジャガイモも、今年はまだ畑の準備もできていません。20坪ほどの小さな畑には、冬越ししたキャベツと白菜が無残な姿をさらしています。でも野鳥にとっては格好の餌場らしく、10数匹のスズメと一緒に、やや大型の鳥が数匹白菜の頭をつついています。すこし近づいて写真を撮ろうとすると、サッと飛んで、ブロック塀の上にとまって監視体制です。“だいじょうぶだよ”と声をかけても、警戒をゆるめる気配はありません。仕方なく身を引いて部屋に入ると、すぐさまつつき始めます。今年は野鳥の数が少ないと言われてはいますが、我が家の畠は、今のところ野鳥の天国です。これを理由に、畑仕事は当面猶予するつもりです。

（H1）